

明治四十四年

二〇二三年度

J₁ 国語問題

注意

- 一、試験時間は五〇分です。
- 二、「はじめ」の合図があつてからページを開くこと。
- 三、解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 四、解答用紙の解答欄の順番に注意すること。
- 五、解答する文字はくずさず正確に書くこと。
- 六、字数制限のある問題については句読点・記号を字数に含めること。
- 七、解答用紙のみ提出し、問題用紙は必ず持ち帰ること。
- 八、問題は十五ページまであります。足りないページや印刷のよく見えないページがあつた時は、手をあげて申し出ること。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、【】は語句の意味で、解答の字数に含めないものとします。

「私の話を聞きながら眠^{ねむ}ってもかまいませんよ。眠って私の話を聞かなくても、ちっとも損になりませんから」。

これは、かの大文豪・夏目漱石^{なつめ そうしつ}が講演^{こうげん}の冒頭^{ぼうとう}で口にした言葉です。さすがの貫禄^{かんりく}とでもいいでしょうか。ずいぶん洒落^{しゃれ}のきいた言葉ですね。でもこの話、じつはこれから話す内容にも少しかかりがあるのです。

さて、今日のテーマは「言葉について」。

これは雲をつかむような話でして、「言葉とは心です」と結論だけ出して、「さて、これで終わります」って帰っちゃえば世話ないんだらうけど、なかなかそう簡単にはいかない(笑)。これが、言葉と心の関係の難しさ。人びとが悩むところはいつだって同じともいえるでしょう。

ところで、言葉の「言(こと)」という字と、事柄の「こと(事)」という字は、奈良や平安の時代のあたりまで同じ言葉だったらしい。そこで、事柄の「こと」と言葉の「こと」を分けるために、言葉の「こと」のほうに「葉」を付けて「言葉」としたんだそうです。それまでは、「言葉」とは「事柄」だ、という考え方があったんですね。言葉と事柄を等しいものとして結びつけていた。言葉のまるで引つかからない事柄^{じへい}ってありますよね。言葉ではすくいとれない、表現できないような事柄。私たちはいつもこれに悩まされる。けれど一方では、だんだん言葉の方に引き上げられて、やがて言葉と融合^{ゆうごう}する、そういう事柄もあるわけです。そのあたりが言葉の問題になるんです。

かつて、事柄が言葉などをまったく受けつけなかったような時代があったと思われる。そのうちに人びとは、事柄は言葉にすくいとられて初めて人の事柄になると感じ始めた。ところがその後、今度は言葉が発達^{はつたつ}しすぎて、言葉が事実から遊離^{ゆうり}して【他のものと離れて存在^{そんざい}して】しまうようになった。現代はそういう弊害^{へいがい}【他に悪影響^{あくえいぎょう}を及ぼす物事^{ぶつじ}】がずいぶん出ている。

家に帰ってきて、今日一日自分が何を話したのか思い出そうとしても、どうもはつきりしない。よくあることです。とりわけ何か大事なことを話そうと思って人と会って、それなりに話してお互^{たが}いに受け答えしたのに、さてひとりになってみると、

いったい何を話したのか。それがふたりの間にある事柄にどういう影響を及ぼしたのか。さっぱり思い出せないことがある。これが今の、日本語の悩みのひとつの現れではないか。

なにも若い人のことばかりを指しているわけではないんです。青年も中年も年寄りも、どう心がけてもやっぱり言葉が上滑^{うわすべ}りしてしまう。②どうしても断片的になって話がまとまらないために、人びとは絶えずイライラしている。政治の場でも身近なところでも同じです。その問題についていくらしゃべってもなかなか埒^{らち}があかない【物事の決まりがつかない】。いったいこの国に何が起きているのか? ——これは残念ながら簡単に答えられる問題ではありません。

じつは、こんな事実があるんです。世の中が豊かになり、それが二〇年、三〇年、四〇年と続くと、人の話す言葉や書く言葉が切れぎれになってくる傾向があるという。これは歴史の上からも明らかにされていることだそうです。反対に、世界が何らかの危機に瀕^{ひん}して【直面^{ていめん}して】いたときには、言葉がもっとしつかりしていた。もっと精密に、もっと綿密に物事を伝えていた。ある意見やある認識をひとまとまりにしつかり述べることができた。ところが平和な時代が続くと、だんだん言葉が切れ切れになってしまう。

これはいったいどういうことでしょうか。同じような平穩^{へいあん}の中にいる人間たちは、いつの間にか生活の様子も同じようなものになるんです。そして、ものの考え方が同じようになる。正確にいうと、「同じようになった」と思ってしまうんですね。だから、あまりしつかりと話さなくても自然と意思が通じると思い込む。そのうちにどんどん言葉が切れぎれになって早口になっていく。

これはなにも日本ばかりではないと思います。外国の言葉も、ここ三〇〜四〇年ですいぶん早口になっている。私は若い頃にドイツ語を学びましたが、後年になってからドイツに行ってみると、みんなずいぶん早口で話すのでびっくりしました。

音楽についても似たようなことがいえます。五〇年代〜六〇年代のアメリカにハリー・ペラフォンテという黒人の歌手がいました。彼^{かれ}が日本で公演を行ったとき、その音楽のあまりの迫力^{はくりき}に驚^{おどろ}かされたのを覚えています。他にも私たちが若い頃に熱中したジャズやポピュラー音楽は、その当時は大層迫力があるように聞こえたものです。

うな感じがしました。ところが三〇年、四〇年経った今になって聞いてみると、のどかに聞こえる。現代の曲のテンポとは比べものにならないくらいスローに感じるんです。

音楽でもそう感じるのだから、たぶん私たち年寄りが普段話しているテンポも、若い人にはずいぶんゆっくり聞こえるんだろうなと思います。私なんかはもとと話すのがゆっくりのたちで、歳をとればとるほどますますゆっくりになってますから、つい眠気を誘うような口調になっていると思いますけど……皆さん、大丈夫ですか？（笑）

③ だいたい、どんなことがあっても人は眠るものです。私自身も高校の頃は、やれ因数因子がどうの、円と振動がどうのといった、そういうしちめんどくさくて小難しい術語【専門用語】を聞きながら、それを子守唄に寝ていたことがありますから。これだけは、時代が移り変わっても変わらないのかもしれない。

それに「講演で人を眠らせるようになったら立派なもんだ。下手な講演だとみんなイライラして眠る事もできない」なんていう意見もある。気がついてみたらみんな気持ちよく眠っているというのは、ある意味では最高の講演ということにもなるんでしょうね。④ ゆっくり、ゆったりと流れる音楽のような講演。漱石もそのことをよくよく心得ていたからあんなことを口にしたのかもしれない。逆にいえば、聞いていて眠ることもできないような、苛立った話しぶりも多いということなのでしょう。

では私たちは何を心がけたらいいのでしょうか？ ただゆっくり話すように気をつければよいのでしょうか？ これまた難しい話です。悲しいかな、人というのは年を取るにつれて耳が悪くなってきました。言葉の聞き取りに齟齬【物事がうまくかみ合わないこと】が生じれば、当然、誤解も生む。それが寄る年波のせいならばある程度はいたしかたのないことでしょう。ところがどうも現代では、若い人たちの耳が悪くなっている。身体的な話ではありません。そうではなくて、今の若い人たちは他人の言葉を耳で聞いてつかむことが下手になっているような気がするんです。

たとえば会社で上司が部下に、今日すべき仕事について、どういう手順で何に用心したらいいのか、丁寧に話して説明するとします。そこで「質問ありませんか」と部下に尋ねると、若い社員が手を挙げて、「マニュアルにしてください。書いてください。でないと頭に入らない」と答えるそうなんです。

「把握」という言葉がありますよね。つかむこと——とりわけ物事の意味や主旨【中心になる目的】を頭でつかむということをして指して使われる言葉です。でも、目でつかむ、耳でつかむ、ということもあるのではないのでしょうか。つまり、目で見たものから、耳で聞こえたものから、直接に理解する。そうした身体的なやりとりから初めて理解できる意味が必ずあると思うのです。

人の会話にとって大切なのは、単に文字のみで表される意味でなく、そこに載せられた感情のトーン【調子】も含めてしっかりとつかむことです。ところが、どうも現代人はあまり静かな場所にいられない。それに、昔と比べてあまりに時間が早く流れる。ゆっくりと聞いたり話したりしている暇がないので、ついつい聞くのも話すのも利根的【きわめて時間短いさま】になってしまう。「会話」というよりは「反応」なんです。言葉を通じた心のやりとりというよりは、単に言葉に対して反応を繰り返しているだけ。話している相互の心情の展開に欠けるというくらい【傾向】がある。これはちょっと恐ろしい。こんな具合に言葉が扱われ続けていったら、この先どうなってしまうのか。強い危惧【心配し恐れること】はありますが、なかなか有効な解決策は見つかっていません。

ところで、「世界で一番わかりにくいのは、日本語とアラビア語だ」と外国人はこんなふうに文句を言うらしい。まあ、たしかに日本語というのはいくら変わった言語体系【組織の全体】ではありません。

じつは、日本以外の世界に住んでいるあらかたの人びとはバイリンガルだともいえます。ひとつに限らずいろんな言語を話せることが多い。たとえばアメリカだったら、英語だけじゃなく、2 スペイン語のほうが通用する地域というのもある。同じように、どの国でもたいてい二カ国語くらいは通用することが多い。

それに引き換え、日本人はモノリンガルだといえるでしょう。日本語以外の言語が通用する地域というのは、まずありえない。日本語というのは言葉と国籍が直結した、いわば体質的な言語だということです。だから外国語を話すことが下手なんじゃないかと言われてしまう。

その考えはたしかに成り立つ。ただ私は、逆にこんなふうにも思うんです。「日本語ほどバイリンガルな言葉はないのかも

しれないな」と。

日本語には「かな」と「漢字」がありますよね。この二つは、姿も体系もまったく異なっている。「かな」から「漢字」へ、「漢字」から「かな」へ、私たち日本人はそのひとつひとつの切り替えを、読むときはばかりでなく話すときも瞬時にこなしているんです。パソコンだったらこの変換は機械がやってくれるわけだけど、日常的なやりとりではそうはいかない。その膨大な量の変換を常に頭の中で行うことになる。そりゃあ疲れるはずですよ。

そのぶん、翻訳は非常にうまい。それから、外国から入ってきた技術を理解して覚えるのも大層うまいといえます。

明治維新のとき、西洋文明の流人と同時に、それまでの日本語の概念【物事についての意味内容】になかった言葉も大量に入ってきました。日本人は、それらに何とか漢字をあてて訳して使ったわけです。たとえば「認識」とか「観念」だとかが代表的な例ですね。それを明治の初めのうちに見事にやってのけた。これは、皆さんが想像している以上に高度な作業なんですよ。

ちなみに今の中国語の中で、政治にかかわるものなど公的に使う言葉の多くは、日本が明治の頃につくった造語を適用しています。それこそ「政治」や「経済」、「民主主義」や「共産主義」といった言葉が良い例です。⑦ いうなれば、言葉の逆輸入ですね。

A

。これも大変おもしろい現象だといえるでしょう。

こんなふうに、かなと漢字という、まったく異なった姿のものを同時に使いこなしてきたのが日本人の特殊性であり特長ともいえるでしょう。これに対し、合理化が進む現代においては「こんな煩わしいことはやめろ、いつそ標準語を英語にしてみなえ」という考え方もあります。実際、すでに社員全員に英語をしゃべらせている会社もあるくらいです。たしかに、外国人との伝達の際にはメリットがあるでしょう。しかし母国語を失った国というのはじつに惨めなものです。

伝統というのは、まさしく「言葉」なんです。その言葉を奪われてしまうということは、足場がない状態とまったく同じ。立つにも歩くにも走るにも、ただ外国の模倣にたよることになる。そもそも日本がこれまでの長い歴史の中で築いてきた伝統は、西洋の伝統とはずいぶん異なっています。その基礎を捨て去って、今さらまるごと西洋から借りなければならぬなん

て、人間の文化にとってこれほど悲惨なことはない。

加えて、西洋の伝統からきた文明や技術の発展は、今や行き詰まりを迎えつつあるんです。年金問題も、核の問題も、すべて西洋で生まれた考え方に由来しています。日本は現代社会を形作るうえで、その文明を借りてきたはいけれど、今になって行き詰まってしまった。そして残念なことに、西洋の文明の力では、この行き詰まりの是正【正しく直すこと】がなかなかできない。でも、東洋の文明——さらにいえば日本独自の伝統なら、その行き詰まりをやわらげるか、是正する力になるかもしれない。そう考えると、伝統というのはそう簡単には手放してはいけないものだということがわかるでしょう。

ところが、日本語はどうもはっきりしない、意味をしつかり限定していないと批判される。これは外国人の多くが感じていることであると同時に、外国語のできる日本人も同様に思っていることのようにです。

たしかに日本語という言語は、いくつかの難点も持っています。いうなれば、非常に悠長な【のんびりした】言語です。表現したい内容を強く限定して投げつけることが上手でない。それに、何か危機が起ったときに発する警告の言葉の力が弱い。他の国の言語に比べて命令形がそれほど発達していない。その命令形が動かす心情自体も強くない。そういう意味では、大変やわらかな言語ともいえます。

それから先にいったように、漢字をかなに、かなを漢字に、頭の中で変換しながら話したり聞いたりしていることの弊害も挙げられるでしょう。もちろん咄嗟のことだから、僕らは意識していない。だけど大変な危機に瀕したとき、ひと呼吸、ふた呼吸遅れる恐れはある。

その一方で、限定ばかりしていくと、こぼれ落ちてしまう **B** もたくさんある。日本語というのは限定しない代わりに、ふわふわと漂うあいまいな **B** も上手にすくいとることができる。ある程度の広がりをもっている言葉を、その広がりそのまま捉えることが可能な言語なんです。

一般的に外国の言葉を使うのが下手なのは、日本人と韓国人だと言われています。でも日本人と比べれば、韓国人の方がよほど上手でしょう。そう言われる理由の一つに、日本語には「子音の種類が少ない」という特徴が挙げられるそうです。つま

り、子音に対する聴覚が発達していない。だからその土地に送られて二カ月〜三カ月、あるいは半年くらい経ないと、そこで使われている言葉を聞き取るだけの聴覚が身に付かないんだそうです。まあ、たしかにそういう面はあるでしょう。でも、問題はもっと根本的な部分に存在しているような気がします。

私たちの使う漢字というのは表意文字です。昔々にさかのほれば、元は象形文字なんですよ。漢字の持つ意味はたいそう広い。私たち日本人は、その意味の深さをたった一文字の中に含んで使っているわけです。つまり、ある意味の広がり、そっくりそのまま捉えて言葉の中に組み込む能力が日本人にはある。無論「言うまでもなく」、漢字というのは中国からのものです。よ。しかし、現在の中国語は、近代日本語の構造をだいたい受けて、かなり表音化しているそうです。むしろ日本語のほうがまだ表意にこだわっている。

そもそも日本人には、意味を一つだけに限定して、単純明快に論旨【論の中心】を組み立てるという習慣が薄かったといえる。そういう技術は異国の人たちと交わるうちに学んで教えられたことで、時代が進むにつれてずいぶん変わったものの、本来はやっぱり、苦手なのかもしれない。

ある **B** を、ある広がりそのままに表現して伝える。聞く方も、ある広がりそのままに聞いて答える。あるいは、その広がりをも自分の中に留める。そういうやりとりのほうが、長い歴史の中で培って【養い育て】きた日本人のもともとの性分なのかな、という気がします。

しかしながら時代が移り変わり、ますます国際化が進むにつれて、言葉のあり方も変わってきている。もともとの性分と、後から流入した使い方との間で、現代の僕らの言葉は分裂しているんですね。これからは、少し悲しいことではあるけれど、伝統をそのまま続けるのではなくて、今の時代に合ったかたちで言葉を使っていくことになると思います。とはいえ、むやみに変えればいいわけでもない。よその国はどうなっているのか、世界ではどういう形が求められるのか考えながら、日本語の意義を再認識することが必要になってくる。

さつきもお話したように、今の世界に生きていて苦しい点は、人がくつろいで話したり聞いたりできる場所が驚くほど少ないということなんです。たとえば、皆さんが恋愛をして、ふたりでちょっと込み入った話をじっくりしたいと思ったり、そういうことができる場所がありません。今の若い人たちは、せわしない周囲に合わせて話すスピードが自然と早くなってしまう。本人たちは込み入った話をしていても、会話が切れ切れになり、走ったりする。 **3**、言葉がじわっと沁み込んでいかない。お互いの理解をじっくり深める事にはなかなかないという面がある。

皆さんの中には古い映画が好きなのもいるかと思いますが、ぜひ一九五〇年代〜六〇年代の日本の映画をご覧になってみてください。そして、会話を耳を澄ましてご覧下さい。そこではじつにテンポがゆるやかなんですね。それから、言葉と言葉のあいだに間がずいぶん入ります。ある人が「〇〇でしょうか」と言うと、だいたい経ってから「□□ですね」なんて答える。その間が流れるあいだに、お互いの思いが少しずつ深まっていくんですね。とくに、小津安二郎の映画の会話のシーンだけでもご覧になったらいいと思います。茶の間でふたりが少し込み入った話をしている。言葉が途切れる。そのあいだに、火鉢にかかったやかんのお湯が沸いてチンチンチンと鳴る音とか、いろいろな物音が入ったんです。そうしたやりとりの様子を見ると、今の自分たちはずいぶんあわただしく話しているなと痛感します。これでは伝えにくいことも受け取りにくいことも多いはずだとつくづく思いますね。

とはいっても、そういうゆったりとした時間の中で生活すること自体、今は無理ですよ。そういう「話の空間」を持てる人は幸せです。

僕はだいたい前に、東京・鶯谷にある「子規庵」という場所で、二〇〜三〇人を相手に話をしたことがあります。これは正岡子規の住まいを復元した昔ながらの木造建築で、八帖くらいの小さな部屋です。それまで、僕が人前で話すときは、今風の鉄筋コンクリートの建物の中がほとんどだった。それはそれで、音響のことがよく研究されたつくりをしている。でも、子規庵で話したときは、「古い木造建築で話すだけで、こんなにも自分の声が深くなったように感じるものなのか」と驚いた。あるいは、「聞く方もこんなにじっくりと耳を傾けるものなのか」とね。

というのも、子規庵では人の声が天井板のほうから反響して、わずかながらエコーみたいな効果になるんですよ。だから絶妙のあんばいで言葉が響く。それに対して、鉄筋コンクリートの建物は反響がきついんですよ。瞬間的に、ピン、と跳ね返ってくる。子規庵のような微妙なエコーとは違います。そんなとがった反響の中にと、

4

恋人同士が話して

これも今の時代にはしかたないことですね。なにか話のできる空間を自分たちでこしらえるといったって、そういう部屋をつくれるわけではないし、ましてや音響効果を自分でやるわけにいかない。これはもう、話す前の気分、雰囲気の問題だろうなあ。今の時代において、少し大事な話を細かい部分にわたって話したいときには、話に入る前の、お互いの間の雰囲気を自分でつくっていくしかないと思う。

ちなみにこういうふうには、公的な場所で話すときも違うんですよ。日本は近代化の際にいろいろな建物をつくりましたが、当時は煉瓦造りが多かった。煉瓦造りっていつてもほぼ模造煉瓦だけだね。とにかく、そのおかげで話すのも聞くのも大変だった。コンクリートと煉瓦では音響がまったく違う。煉瓦の方がどうもうまい具合にエコーがかかる。これが言葉の伝達をいいあんばいで助けてくれた。ところが、コンクリート建築だとそうはいかない。人の議論がどうしてもとげとげしくなるし、ささいな発言がすぐに人につきささるところになり、物争いの種になる。そういう弊害はあるのでしよう。

そういうとげとげしいやりとりが横行している中で、今の若い人たちに対してよく言われているのが、「言葉を大事にしろ」ということなんです。これには僕も同感です。けれど、ただそう言っただけでもしかたがない。いったいどう大事にすればいいのかがわからないからみんな苦労しているんですよ。

ひとくちに言葉といっても、いろいろな単語が存在します。加えて、それらの単語の意味の範囲や、さらには意味合いといった複雑な問題がつねに横たわっている。どういう言葉とどういう言葉とが結びつきやすくて、どういう言葉とどういう言葉とが反発するのか。そういう大切なことを、おいおい心得ていかなければならない。

言葉と言葉づかい。それをどこで磨くかという点、以前は親から子に教えられるものだったんです。大人から若い者に教え

られるものだった。ところが今の時代はそれが非常に難しい。「いまどきの若いもん」なんてよく言うけど、同時に若い人からすれば「いまどきの年寄り」はとも言いたくなる場所ですよ。この歳だから告白しますが、私たちは年をとってもなかなか成熟できない。私も「年寄りの言う事はアテにならねえな」って思うこともあるんですよ。でも、そういう依怙地な「意地をはった」点は今回は多少勘弁してやってください(笑)。

親から子へ、

5

年寄りから若い人へ、そういう受け渡しはなかなか難しい時代だとしたら、いったい何に頼ればいいのか。古めかしい技法だけれど、それはやっぱり、本を読む事ではないでしょうか。

本を読むときに、その主意や、「これは何を追求しているか」なんていうことを考えるのも大事ですが、読書の効能はそれだけじゃあないんです。もちろん、本を読む目的はそれでもいいかもしれないけど、まずは、いろいろな時代のいろいろな人の口調に触れることが大事です。たとえば、皆さんが夏目漱石の本を読むとする。正直なところ、読んでいる間はもうちんぷんかんぷんだと思う(笑)。使われる熟語のただでなく、語り口調だって、今の時代とはおよそ遠い口調ですよ。でも、読んでいくうちに「あ、こういう口調で話してたんだ」「こんな言葉の使い方をしていたんだ」と感じることはたくさん出てくるはず。そういう感じ方の積み重ねから、いわゆる言語感覚というものが磨かれていくんです。

では、具体的に、「言葉を大事にする」にはどうしたらいいのか。

いっそ、「話す」ということを二通りに分けてみてはどうでしょうか？

親しい人と気分のおもむくままに言葉をやりとりするのもいいでしょう。けれど、ある一定の距離をとりながら、しかも複雑なことを話さなければならぬような場合も当然あるはず。そのときに、親しい人と言葉をやりとりするような話の仕方をすれば、喧嘩になるか、もしくは何も同意していないのに

C

してしまふ。どうも曖昧なことになってしまふ。そういう、居ずまいを正すべき場面に必要な話し方も、身につけておかないと、あとあとになって悔やむことになります。

言葉というのは形式上、口語と文語に分けられることがあります。一般的に文語というのは、古代の文章をつくり出している言葉ですよ。そういう分け方はもちろん正しい。でも、ここでひとつ、「われわれの時代にも口語と文語はあるんだ」っ

てぐらいに考えてみてはいかがでしょう。

つまり、親しい者同士で、短い言葉を投げつけ合ったってお互い^{おの}自ずと理解できる場合——こういうときに使う言葉を口語とする。これに対し、話す者同士の間に距離があつて、なおかつテーマもやや込み入っている場合は、言葉だけで正確に伝えないと誤解が生じてしまう。言葉だけで共通の認識を組み立てないといけない。こういうときに使う言葉を文語とする。

口語と文語。二通りの言葉を学ぶ。当然、ひと通りの言葉づかいだけを身につけるよりもきついでいだけれど、そういう心得も必要ではないでしょうか。

昔は大学に進む人間のパーセンテージが今よりよほど少なかった。小学校か、あるいは小学校の上につく高等小学校を出てすぐに働きにでる人間が多かった。歳にすれば、一二―一四。まだまだ子供ですよ。実際、普段のおしゃべりを聞いていると、すつ飛んだことばかり言っている。ところがいったん商売につくと、まるで話し方が違ってくるんですよ。それまでの物言いからは信じられないような、大人びた言葉づかいをするようになる。私は大学に行ったほうだけど、彼らに比べると、大学にいる人間ってのはいつまでもずいぶん子どもっぽい話し方をしているな、と思ったものです。

今の時代だと、使い分けというのはあまりいいことではないとも言われますよね。人として裏表があるとか。逆に、率直一本の物言いはもてはやされる傾向にある。しかしそれは、ずいぶん幼稚な感覚なんですよ。人はそのときそのときによって、いろいろな D にある。皆さんだって、友達に対する D と、親に対する D、あるいはよその年寄りに対する D はまるで違うでしょう。それを自ずから使い分けているはずですよ。ただし、今の人はその使い分けが少し下手です。そのせいで、言葉が通じにくくなるし、言葉自体もみっともないものになる。

いろんな D を使い分けるのは、皆さんにしてみれば一見するいことのように思えるかもしれない。けれど、使い分けてみて初めてわかる、言葉のおもしろさ、奥深さっていうのはやっぱりあるんですよ。使い分けることに馴染むほど、言葉が成熟する。そういう側面もある。ただ率直、ただ飾り^{かざ}り気がない、ただ陽気、ただ明るい……むしろこういうのは、じつは人間の

の成長にとって問題なんです。

とくに戦後の教育では、「明るい」ということが世間で強調されすぎて、暗くしていることはいけないことだという風潮ができた。だけど、人間明るくしてばかりいられますか？ 暗い部分も当然あるでしょう。本来、それはなにも悪いことじゃない。

人間の、ちょっと複雑に入り組んだ部分。あるいは、容易には底が見通せないような暗い部分。そういう部分を、これからほっと尊重したほうがいいように思う。ただ、それにはいろいろ危険が伴^{ともな}うのも事実です。ともすれば、底に沈^{しず}みっぱなしになってしまうことがある。それを救うのが、まさしく言葉ではないかと私は思います。

言葉っていうのは、自分ひとりのものではないんです。今の時代だけのものでもない。大勢の他人の、これまでに亡^なくなった人も含めた長い長い歴史からできあがったもので、自分の勝手にならない代わりに、自分が追いつめられたときに支えになつてくれる。

なにも「新しいものの言い方が悪くて、古いものの言い方はいい」という、そんなつまらない問題じゃあないんです。もともと人間が、自分の内面の複雑さを取り戻^{もど}して、それ相応の言語を身につけることが、これからはとくに大事なのではないか——私はそう思っております。

やっぱりこんなふうに皆さんの前で話してみると、どこか年寄りの練^くりごと【愚痴^{ぐち}】みたいになりますね。でも、年寄りの言葉って、後々思い出すと多少役には立つもんなんです。直接にはなかなか言葉は響いてこないかもしれないけれど、時間を隔^{へだ}てたときに、はっと思い返すこともある。まあ気長に年月を待ってみてください。皆さんが年を取り、ただ率直には生きることができなくなったとき、こうした言葉が響いてくるのではないか、少しはその困難の助けになるのではないかと期待しています。

どうも、眠たい話にもかかわらず、ご静聴ありがとうございました。眠ってしまったっていても損にはならないけれど、起きて耳に入れておいてくださっても、やっぱり損にはなりませんから(笑)。何十年か後の小さな楽しみにでもしておいてください

い。

(古井由吉他『中学生からの大学講義2 考える方法』より・一部改変)

問一 ― 部①「夏目漱石」の作品を、次のア～カから全て選び、記号で答えなさい。

- ア 『走れメロス』 イ 『吾輩は猫である』 ウ 『羅生門』 エ 『雪国』
オ 『坊っちゃん』 カ 『蜘蛛の糸』

問二 ― 部②「どうしても断片的になって話がまとまらない」とありますが、それはなぜか、具体的に答えなさい。

問三 文中の 1 5 にあてはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

- ア たとえば イ あるいは ウ むしろ エ まるで オ だから

問四 ― 部③「これ」、⑥「これ」、⑪「それ」、⑫「それ」の指示内容をそれぞれ答えなさい。

問五 ― 部④「ゆつくり、ゆつたりと流れる音楽のような講演」とはどのような講演か、本文中の言葉を使って具体的に答えなさい。

問六 ― 部⑤「若い人たちも耳が悪くなっている」とありますが、どういうことか、その原因にも触れながら答えなさい。

問七 文中の A は、―― 部⑦「いくなれば、言葉の逆輸入ですね」とはどういうことを述べている箇所である。 A の内容を考えて答えなさい。

問八 文中の B にあてはまる言葉を、本文から漢字二字で抜き出さなさい。

問九 ― 部⑧「もともとの性分と、後から流入した使い方との間で、現代の僕らの言葉は分裂している」とはどういうことか、答えなさい。

問十 ― 部⑨「むやみに変えればいいわけでもない」とありますが、なぜ筆者はそう考えるのか、答えなさい。

問十一 ― 部⑩「話の空間」とは何か、本文から二十字で抜き出し、初めと終わりの三字を答えなさい。

問十二 文中の C にあてはまる四字熟語として最適なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 右往左往 イ 質疑応答 ウ 意気投合 エ 心機一転

問十三 文中の D にあてはまる言葉を考えて、漢字二字で答えなさい。

問十四 日本人は日本語とどのように関わっていくべきか、筆者の主張を解答欄に合うように百字以内でまとめなさい。

二

次の1～10の文中の(カタカナ)を漢字で書きなさい。

- 1 (キンイツ)な値段がつく。
- 2 (シフク)を感じるひととき。
- 3 (コウケイ)の大きなレンズ。
- 4 歴史の地を(タンボウ)する。
- 5 寺社(ブツカク)に参拝する。
- 6 彼の実行力に(ケイフク)する。
- 7 (タイシユウ)向けの小説を読む。
- 8 会議で決を(ト)る。
- 9 ビルの完成に(ツト)める。
- 10 (ノ)べ千人余りが出場した。

J	1				
---	---	--	--	--	--

--	--

--	--

--	--	--

が大事である。

へ